

交通としての言語ゲーム

——サルトル他者論——

井 原 奉 明

Language Games as Intercourse
—J.-P. Sartre's Theory of *Others*—

Tomoaki Ihara

Abstract

The author has two purposes in mind when he writes this paper. One is to clearly show the importance of capturing communication as social intercourse, which signifies a dialogue not within but between the communities, denying the idea of traditional view of communication as authentic “speaker-hearer” model. The other is to explicitly insist J.-P. Sartre's *others* are the same as what the author talks about in this paper. The *others* have asymmetric relation to me, do not share the communal code, and have the right to determine the meaning of what the speaker says.

本稿では、他者とのコミュニケーションこそが共同体を活性化させ、自らの成長を図ることができるという考えの下、従来のコミュニケーション・モデルを独我論的モノローグ、つまり「語る－聞く」モデルとして斥け、「教える－学ぶ」モデルを導入して、「交通」としてのダイアログの重要性を述べる。また、他者を考察した先行研究の中で、本稿ではサルトルを取り上げ、彼の他者論が本稿の論旨に沿うことも論証する。

1. コミュニケーションの基本モデル

コミュニケーションの基本形を、ヤコブソンのモデルに求めてみる。彼はコミュニケーションに不可欠の六つの要因を示し、それぞれを次のように説明している。

発信者 addresser は受信者 addressee にメッセージ message を送る。メッセージが有効であるためには、第一に、そのメッセージによって関説される コンテキスト context (“関説物 referent” といういささか曖昧な術語で呼ばれることもある) が必要である。これは受信者がとらえることのできるものでなければならず、ことばの形をとっているか、あるいは言語化され得るものである。次にメッセージは コード code を要求する。これは発信者と受信者（言い換えればメッセージの符号化者と復号化者）に全面的に、あるいは少なくとも部分的に、共通するものでなければならない。最後に、メッセージは 接触 contact を要求する。これは発信者と受信者との間の物理的回路・心理的連結で、両者をして伝達を開始し、持続することを可能にするものである。（下線部は原文のまま）¹

このようなコミュニケーション図式を本論ではヤコブソン・モデルと呼ぶことにする。² ヤコブソ

ン・モデルに関して、次の特徴的な二点を指摘することができる。ひとつは、メッセージを一義的に規定し得るコード・規則が存在し、³ 発信者と受信者に前提され共有されると考える点。もうひとつは、そのような規則を共有するが故に発信者（語る主体）と受信者（聞く主体）は対称的、つまり交換可能であり、自分に当てはまることは対話者にも当てはまると考える点。これら二点の特徴により、意味は、コードを共有する発信者と受信者のどちらに対しても透明になる。つまり、発信者が規則に従って符号化（エンコード）し、受信者が共有規則に従って複号化（デコード）する意味は、原則的に発信者の意図通りに一義的に受信者によって理解される。

2. 独我論的モデルから他者を含むモデルへ

ヤコブソン・モデルにおいては、発信者と受信者は対称的であるから、対話者を、私の考える意味で他者と呼ぶことはできない。他者とは、私の考えによれば、私の従う意味体系の外に位置する存在、私の意味が通じない可能性を持つ存在を指すからである。ヤコブソン・モデルのコミュニケーションは、発信者と受信者の間で意味が通じ合わない場合が抹消されている点で独我論的であり、自己対話（モノログ）的である。柄谷行人は独我論という用語に関し、次の見解を示している。「私が独我論とよぶのは、けっして私独りしかいないという考えではない。私にいえることは万人にいえると考えるような考え方こそが、独我論なのである。」⁴ 独我論をこのように定義すれば、ヤコブソン・モデルが独我論的であることはいうまでもないだろう。ヤコブソン・モデルでは、対話者が自分と対称的、交換可能であること、対話者と意味が通じ合うことを前提としているからである。対話者と私との意味論的差異はないとされ、発信者と受信者は理想的に同化している。このようなコミュニケーションは、いつでも、どこでも、誰にとっても、摩擦のない滑らかなやり取りとなるだろう。

このような理想モデルは現実のコミュニケーション考察に役立つのだろうか？ 筆者の考えは否である。筆者の考えでは、ヤコブソン・モデルと対極にある、自己対話（モノログ）でないコミュニケーション、ことばの真の意味でのダイアログこそコミュニケーション考察のモデルとしなければならない。ダイアログとしての対話（ウィトゲンシュタインに倣って言語ゲームといってもよい）とは、対話者が他者であるコミュニケーションのことである。では他者とは誰か？ 他者とは、先に述べた言い方と異なる言い方をするなら、私に対して非対称的な関係に置かれる者、コード・規則を共有しない者、われわれのことばを理解しない者、われわれと異なる意味づけをする者のことである。他者は、ヤコブソン・モデルを無効にしてしまう存在であり、「私自身の“確実性”をうしなわせる。」⁵

柄谷は、ソシユールおよび現象学的観点に従うヤコブソン・モデルを「語る－聞く」モデルと呼び、他者が現れるモデルを「教える－学ぶ」モデルと呼ぶ。われわれのことばを理解しない他者への語りかけを「教える」、他者が聞く行為を「学ぶ」と呼び、それぞれ「語る」「聞く」と区別する。「教える－学ぶ」モデルにおいては、言語ゲームに参加する私と他者との間に、規則が共有されない。そもそも言語ゲームの規則があるかどうかはわからない。他者は、私の意味づけた通りに理解しているように見える場合であっても、それに根拠はなく、本当のところ理解していないかもしれないし、予期せぬ反応を示すかもしれない。⁶ 他者は私のことばを理解しない者、私と交換可能でなく非対称的な者だからである。他者は、「教える－学ぶ」モデルからコミュニケーションを捉える時にはじめて現れる。⁷

ヤコブソン・モデルでなくその対極といえる「教える－学ぶ」の視点から言語ゲームを見ようとす

る理由は、「語る－聞く」という独我論的考え方では、コミュニケーションの重要な側面を見落とすことになってしまうからである。重要な側面とは「交通」のことであり、「交通」とは〈ひとつの共同体の内〉ではなく〈諸共同体の間〉の場におけるやり取りのことである。⁸ ヤコブソン・モデルに典型的な、「語る－聞く」という「通例のコミュニケーション論では、共通の規則が前提されて」⁹ おり、共同体内部の閉じた回路において対称的な対話者が一義的な意味のやり取りを行う、と考えるのは先に述べた通りである。しかし、「教える－学ぶ」の視点から「交通」という側面を視野に入れば、言語ゲームというものが本来規則を共有しない非対称的な対話者の間で為されるものであることが浮かび上がってくる。根源的・原初的な言語ゲームとは、そのようなものではないだろうか？「交通」としてのダイアログにおいて、共通の規則は対話の成功の事後に演繹されるほかなく、意味は不透明であり、一義的であると仮定できない。ダイアログをそのような手探りのコミュニケーションとして見ることで、ヤコブソン・モデルで抹消されている対話者の他者性を顕かにし、コミュニケーションに新たな光を当ててみたいのである。

根源的・原初的な言語ゲームにおける他者、「交通」としてのダイアログにおける他者とは、たとえば外国人や子供、ことばの通じない者のことである。柄谷はこう述べる。「外国人や子供に教えるということは、いいかえれば、共通の規則（コード）をもたない者に教えるということである。逆に、共通の規則をもたない他者とのコミュニケーション（交換）は、必ず「教える－学ぶ」…関係になるだろう。」¹⁰ 立川健二は他者について以下のように述べている。「《他者》とは、わたしの「言うことをきかない」者、けっしてわたしの思いどおりにならない者、わたしが暗に前提としている意味＝価値体系の存立を危うくする、わたしにとって不可解な存在のことである。」¹¹

「交通」としてのダイアログ、つまり「教える－学ぶ」モデルのコミュニケーションにおいて、教える側と学ぶ側は非対称的であり、規則を共有しているとはいえないから、自分に当てはまることが対話者に当てはまるとは考えられない。この学ぶ側が他者である。他者にとって、教える側の意味をその通りに理解するとは限らず、理解は多義的ないしは無意味的である。教える側は、「語る－聞く」モデルの語る主体とは異なり、誤解や無理解に怯えながら、自らの意味づけを教えるしかない。「教える」側からみれば、私が言葉で何かを「意味している」ということ自体、他者がそう認めなければ成立しない。私自身のなかに「意味している」という内的過程などない。しかも、私が何かを意味しているとしたら、他者がそう認める何かであるほかなく、それに対して私は原理的に否定できない。」¹²

「交通」としての言語ゲームは特殊なケースだという批判があるかもしれないが、そのようなことはない。規則を前提とし、一義的なやり取りができてるように見える、ヤコブソン・モデルに従うように見える事態すら、「教える－学ぶ」という視点から見べきなのである。そのような事態においては、見かけ上、言語ゲームが円滑に進んでいるように見えるだけなのであり、「交通」という側面は顕在化せずに隠蔽されているだけなのである。言語ゲームにおいて、今の今まで話が通じていると思っていた対話者が突然無理解や誤解を示すことなど枚挙に遑がないだろう。このような論旨で、柄谷は反語的に次のような問いかけを投げかけている。「外国人や子供、あるいは精神病患者との対話においては、そのような規則はさしあたって成立していないか、または成立することが困難である。これは、特異なケースだろうか。」¹³ もちろん、これは特異ではない。なぜなら、「われわれが誰でも子供として生まれ、親から言語を習得してきたということは、けっして特異なケースではなく、一般

的な条件である」¹⁴ し、「また、われわれが他者との対話において、いつもどこかで通じ合わない領域をもつことは、一般的にいえること」¹⁵ だからだ。

であれば、「教える－学ぶ」という非対称的な関係が、コミュニケーションの基礎的事態」¹⁶ であると考えねばならないだろう。柄谷は続ける。「これはけっしてアブノーマルではない。ノーマル（規範的）なケース、すなわち同一の規則をもつような対話の方が、例外的なのである。だが、それが例外的にみえないのは、そのような対話が、自分と同一の他者との対話、すなわち自己対話（モノログ）を規範として考えられているからである。」¹⁷

柄谷はこう書いている。「教える」立場ということによってわれわれが示唆する態度変更は、簡単にいえば、共通の言語ゲーム（共同体）のなかから出発するのではなく、それを前提しえないような、場所に立つことである。そこでは、われわれは他者に出会う。他者は、私と同質ではなく、したがってまた私と敵対するもう一つの自己意識などではない。むしろこの場所は、われわれの方法的懐疑によってのみ見出されるものである。」¹⁸

「教える－学ぶ」に基づく「交通」としてのダイアログを見る視点について、柄谷は次のようにまとめている。

聴く立場から教える立場へ。このことは、べつに難しい事柄ではなく、誰もが日常的に経験している事柄にかかわっている。たとえば、だれでも、自分のいうことが他人に「意味をなす」（make sense）と確信することはできないし、自分の生産物や労働力（商品）が他人に売れることを確信することはできないだろう。つまり、記号・形式（それがどんな素材であってもよい）の差異性が意味を成り立たせるというようなことではなく、そもそもその前に、そのような記号・形式で何かを「意味している」ことが、《他者》にとって成立するか否かが問題なのだ。あるいは、そこに存する無根拠的な危うさが。（傍点は原文のまま）¹⁹

「教える－学ぶ」立場のコミュニケーション、「交通」としてのダイアログを言語ゲームという方法概念かつ事実概念の下に考察したウィトゲンシュタインのことばも引いておこう。ヤコブソン・モデルに従うコミュニケーション観を斥けるために、ウィトゲンシュタインは、こういつている。

わたくしは言いたい、あなたは、ひとが誰かに何かを伝達できるということを、あまりにも自明なことと見なしすぎている。すなわち、われわれはあまりにも話すことによる伝達、会話における伝達に慣れすぎているから、伝達の全眼目が、わたくしのことばの意義－何か心的なもの－を他人が把握し、いわばそれを自分の精神の中へ拾い上げることのうちにあるように、われわれには思える。そのときかれがそのことによってさらに何かやり始めるとしても、それはもはや言語の直接目的の一部ではないのだ、と。²⁰

ヤコブソン・モデルを斥け、「教える－学ぶ」モデルによる「交通」としてのダイアログ観からコミュニケーションを考察する立場には、独我論的・自己対話（モノログ）的な閉鎖性を解き放ち、対話の回路の開放を通じて共同体の活性化を図り、対話者が人間的な成長を図ることができるという狙いが結びついている。立川はこういつている。

〈^{インターコース}交通の力〉というのは、ひとつの共同体ではなく、共同体と共同体の「間」のコミュニケーションをひきおこし、共同体を外部へと開いていく力のことである。いいかえれば、内部でしか通じない「ムラ」や「グループ」の言葉、仲間内のコミュニケーションを維持していく力が、共同体を内側へと凝縮させ、外部

にたいして閉鎖的なものにし、それを沈滞化させるのにたいして、共同体をこわしたり作りかえたりして、それを生き生きと流動化させていく力がある…。(ルビは原文のまま)²¹

閉ざされた、独我論的・自己対話（モノログ）的な対話の回路にとどまるということは、自分に当てはまることが他にも当てはまる世界から出ないということである。自己対話にとどまっていたら、異質な他者との交流は閉ざされ、安楽かもしれないが自分を変えるきっかけに乏しい世界から抜け出すことができない。同質の者の中での安穩としたコミュニケーション、つまり独我論的自己対話しかせず、「交通」としてのダイアログを拒む若者たち。自分の言うことを聞くイエスマンばかりを周りにおいて王様のような悦楽に浸る大人たち。外部へ出たがらず内向きだという批判は若者だけでなく大人にも当てはまる。年齢の問題ではなく、意識の問題なのである。

人々の持つこういった閉鎖的意識が現代日本の大きな問題のひとつであることはいうまでもない。独我論的・自己対話（モノログ）的世界から抜け出るためには、「交通」としてのダイアログが行われる言語ゲームを厭わずに営まねばならない。立川はこう書いている。「もしもあなたがいつか共同体の外に放りだされ、異質な言語がぶつかりあう交通の世界に投げだされたならば、あなたは共同体のなかでの自分の役柄や「アイデンティティ」を剥奪され、固有の「顔」と「名」しかもたないひとりの個人へと成長していかざるをえないだろう。」²² 地位や肩書などが通じない、一人の人間として対話者と向き合うしかない言語ゲーム。このような「交通」としてのダイアログの対話者こそ、他者なのである。独我論的自己対話の対話者は決して他者ではない。そして私たちは他者を見出さねば、自己の成長を図ることができないし、共同体を活性化させることもできないだろう。

3. サルトルの他者

本論文では、サルトル哲学における他者が、「交通」としてのダイアログの対話者たる他者とみなしうのかどうかを論じる。筆者は「みなしうる」と考え、サルトル他者論を精緻に考察することは本論の方向性に資するところ大であると論証したい。

まず、柄谷の考察からはじめよう。柄谷によると、サルトルの他者は、本論でこれまで述べてきた意味での他者ではない。先に引用した柄谷の「私と敵対するもう一つの自己意識などではない」という文における「私と敵対するもう一つの自己意識」とはサルトルの他者を念頭に置いていると思われる。彼はサルトルを名指し、次のように書いている。

この《他者》は、サルトルのいうような他者とは区別されねばならない。後者は、もともと、ヘーゲルの「主人と奴隷」にかんする考察——すなわち自己意識ともう一つの自己意識との相克——に発している。そして、この場合、一つの自己意識ともう一つの自己意識は、互いに置きかえ可能であり、同質的なのである。いいかえれば、対称的な関係にある。しかるに、われわれのいう《他者》は、異質であり、われわれが“考えている”ように考えているという保証はない。相克に終始しようと、妥協や和解に終ろうと、そもそも《他者》との間に、「ゲーム」が成立するか否かが不明なのだ。²³

柄谷は、サルトルの他者は私と同質的であり、対称的、交換可能だと考えている。彼はこのような譬えで説明する。

サルトルは、他者の眼差がわれわれ（対自在）を凝固させるという。しかし、たとえば猫の眼差ではな

ぜそうならないのだろうか。そこでは「言語ゲーム」がほとんど成立しないからだ。比喩的にいえば、《他者》は猫に似ているとってよいかもしれない。われわれに時たま関心をよせるかと思えば、まったく無関心であるような猫に。(ルビは原文のまま)²⁴

筆者は柄谷の意見に反対である。他者は私と同じ対自存在ではあるが、それは俯瞰的に見ているからそういえるのであって、他者の対自性は私が對他存在と化す時にだけ顕わになるという意味において、他者は常に私と非対称的な関係にある。他者は私の意図によって私の世界に現れるのではなく、私の世界の外から唐突に私を襲う。他者の登場によって私は凝固させられ、對他存在と化すが、それは私によって基礎づけられず、私を逃れている受動的な存在体験であるから、私は意味づけの主体性も奪われてしまうと考えるべきであろう。それに、他者が私と同じ対自であるからといって、私と同じ意味体系を持つ保証はどこにもない。

さらに柄谷に二つの点で反論したい。ひとつには、他者とは、柄谷が例として挙げた子供や外国人といった〈もの〉として定義されるのではなく、私と対話者とが非対称的な関係にある〈こと〉、規則を共有しない〈こと〉、異なる意味づけをする〈こと〉として定義されるべきだからである。もうひとつには、他者の他者性は、言語ゲームがほとんど成立しない点にあるというよりむしろ、言語ゲームが進行している間は隠蔽されていて、言語ゲームがうまくいかなかったその時に不意に顕現される、そのようなものだからである。

この主旨を説明してみよう。他者であるかないかは、〈もの〉の問題ではない。もちろん、規則を共有しない者、という言い方で、他者を〈もの〉とみなす発想も可能だろう。しかし筆者の考えでは、規則を共有しているかどうかはその人が言語ゲームをうまく進めることができたという事実を基に、事後的に、回顧的に遡及した時にしか判断することができない。言語ゲームの一手を打つことができる間は規則を共有していると判断することができ、言語ゲームを進める一手を打てない時に規則を共有しないことが判明するのである。規則を共有しない者という〈もの〉的判断には、規則を共有しない〈こと〉が論理的に先行する。故に、子供や外国人のような〈もの〉がいつでも他者なのかというと、そのようなことはないのだ。言語ゲームが円滑に進む時、つまり対話者が見かけ上私のことばを理解しているように思われる時、たとえ対話者が子供であろうと外国人であろうと、他者性は隠蔽されている。ところが、対話者が私のことばを理解しない、理解した行動をとらない、言語ゲームを前進させる一手を打つことができない、そのような場合に対話者の他者性は顕わにされるのである。「理解しない者」たる子供や外国人等は常に他者という〈もの〉なのではなく、理解しない〈こと〉により、その〈こと〉において彼らの他者性が顕わになるのだ、と筆者は考える。

筆者の考えに従えば、サルトルが論じた他者は、十分に他者性を備えていると思われる。他者は、私と非対称的な関係にあり、私の意味世界の彼方に存在し、私の意味づけを無効にする言語ゲームにおいて、その姿を顕示する。サルトルの他者の他者性は〈もの〉ではなく、〈こと〉において隠蔽され、顕わになる。サルトルの他者との言語ゲームは「交通」としてのダイアログである。

宇野邦一は、「まなざしは、私と他者との根源的な非対称性をあらわにする」²⁵ と考え、「非対称性は、まなざしにおいて、たえず反転する」²⁶ と述べている。筆者も賛成である。サルトルの他者は、柄谷がいうような対称的・交換可能な存在ではなく、非対称のまま反転する存在なのである。

サルトルの他者論を詳しく見る前に、先取りしてしまえば、〈対象－他者〉は、本来的に私

と同様、対自であり、私以外の対象にまなざしを注ぐという点で、私と対称的である。一方、〈主観－他者〉は、対自でありながら私と同時に現れることはなく、私を他有化・対象化してしまう点において、片や対自、片や対象という非対称性の関係に置かれる。言語ゲームにおいて対話者が〈主観－他者〉なのかは、言語ゲームが円滑に進んでいる限りわからない。対話者が〈理解しない〉言動を〈こと〉において示してはじめて、言語ゲームが「教える－学ぶ」立場に立っていること、対話者が他者であり、しかも〈主観－他者〉であるということがわかるのである。〈主観－他者〉は、私を対象化しない〈対象－他者〉と異なり、私の意味づけや確実性を無効にしてしまう力を持つ存在である。私の意味づけは、他者によって理解されない限り意味として通用せず、〈主観－他者〉は互いの意味づけが相反する場合において私の意味づけを無意味にさせる可能性を持っている。こう考えると、サルトルの他者は〈教える－学ぶ〉モデルの非対称的な対話者、すなわち他者であるといえるのではないか、と思えるのである。

立川は筆者と別の角度から柄谷に半ば同意し、半ば反論している。彼は柄谷の論に対し、次の点では同意している。

サルトルの「対他存在論」は、全体としてみれば、たしかに柄谷の指摘するように、眼差を向け、向けられるという、主体・客体間の相克、すなわちある種の「言語ゲーム」の成立を前提として構築されているといえてよいかもしれない。²⁷

立川は、しかし、サルトルの言語論を取り上げ、言語における対象、すなわち他者とは、規則を共有しないような、いわば「猫」のような存在なのだと述べる。²⁸「猫」のような他者のまなざしが現れ、私が対象化・他有化されそうな時、私は他者に働きかけることでその脅威を回避しようとする。これが誘惑であり、立川によれば、サルトルの言語論は誘惑論の嚆矢として価値が高い。先の引用に続けて立川は柄谷に反論してこう述べる。「しかしながら、彼（筆者注：サルトル）が『存在と無』の第三部第三章「他者との具体的諸関係」において「言語（Langage）」を論じるときには、彼ははっきりと《誘惑する立場》にたっている。彼は言語を恋愛の主体の存在様式そのものとしてとらえており、そのとき、恋愛の対象＝他者とは、〈恋愛ゲーム〉を共有しないような、いわば「猫」のような存在なのだ。つまり、サルトルのいう《他者》は、ここでは自己にたいして同質的なものではない。」²⁹

筆者の考えを論証するために、以下、『存在と無』第三部「対他存在」第一章「他者の存在」IV「まなざし」におけるサルトルの他者論を追ってみたい。筆者の考えを繰り返せば、サルトルの他者が、コミュニケーションにおいて非対称的な関係に置かれる存在であること。私の存在から演繹されるような、私と同じコードを共有し、私の意味した通りの理解をし、私の理解できることばでパロールを語る存在ではないこと。それどころか、私の意味づけを無効化し、私の理解できないことばを語り、その意味を私に押し付ける可能性のある存在であること、である。

サルトルは「まなざし」において、他者に関する論をこのように書き始めている。

こちらへやって来るのが見えるあの女、道をとおるあの男、窓から歌声のきこえてくるあの乞食、それらは、私にとって、対象である。そのことは、疑うべくもない。それゆえ、私に対する他者の現前の、少くとも一つの様相が、対象性であるということは、たしかである。（傍点は原文のまま）³⁰

『存在と無』の第二部までのところで、サルトルは、対自と即自の区別を立て、意識が対自存在である一方、それ以外の存在は即自であると語っている。即自は、自らがそれであり続けるものであり、志向性を持つ対自によって対象として把握される存在である。しかし、『存在と無』の第三部で述べられる他者を考慮に入れる時、意識を持った存在、すなわち私と別の対自である他者が、単なる対象であるはずがない。即自の持つ対象性は、私から見た他者の根本的な特徴ではないのである。私による他者の根本的な把握においては、「他者は私に対してもはや対象としてあらわれるのではなく、『身みずからの現前』 présence en personne としてあらわれる。」³¹

この根本的な把握とは、後で見るように、知覚や認識による〈対象－他者〉の把握ではなく、それに先行する、羞恥や自負といった私の存在体験から浮き彫りにされる〈主観－他者〉の把握である。ただ、そこに進む前にまず対象として現れる他者、すなわち〈対象－他者〉とはどのような存在なのか、明らかにしておこう。サルトルは次のような具体的場面を想定する。

私は、いま、公園のなかにいる。ここからさして遠くないところに芝生があり、芝生にそって幾つかのベンチがある。ひとりの男がベンチのそばを通る。私はその男を見る。私は彼を一つの対象としてと同時にひとりの人間としてとらえる。それはどういう意味か？³²

サルトルによれば、〈対象－他者〉の出現は重大な変化を私の世界にもたらす。即自に関する知覚や認識が私の世界の中で起こる出来事であるのに対し、私とは別の対自である他者との出会いは私の世界そのものを変容させる。たとえば、彼が対自でなく、即自存在だとしたら、公園のベンチをはじめとする諸々の対象と私との関係は変化を被らない。私とその即自存在との間に新たなひとつの付加的な関係が結ばれること、その即自存在と他の諸々の対象との間にまた新たな付加的な関係が結ばれたこと、だけが出来たのであって、私の世界・私の宇宙は根本的に変化しない。ところが、彼が対自だと認めることは、彼を中心とする世界・宇宙が開かれることを認めることなのである。彼は、私とは異なる別の特権的中心として世界の諸事物と関係する。彼と芝生との関係は「私から脱れ去り、私は私を中心に置くことができない。」³³ サルトル風にいえば、私が、私の宇宙の中で、彼と芝生という二つの対象の間に打ち立てる関係を、彼が芝生に打ち立てる関係が否定する。対自たる彼が世界の諸事物に関係を打ち立てることにより、私の宇宙の諸事物相互間に私がとらえる諸関係は崩壊する。それ故、サルトルはこういう。「私の宇宙の諸対象のあいだに、この宇宙を崩壊させる一つの要素が出現すること、それが、「私の宇宙のなかへの一人の人間の出現」と私が呼ぶところのことである。」(傍点は原文のまま)³⁴ 対自たる彼の出現により、私の宇宙は私の意味づけとは無関係に再編成される。「私は立ち会いながら、この再編成は私から脱れ去る」³⁵ のである。

〈対象－他者〉の出現をサルトルは次のように要約している。

かくして、突然、一人の対象があらわれ、それが私から世界を奪い去った。すべてのものはもとの場所にある。すべてのものはいまなお私にとって存在する。けれども、すべてのものは、一つの見えざる逃亡によって貫ぬかれ、一人の新たな対象の方へ向かって凝固する。それゆえ、世界のなかへの他者の出現は、全宇宙の一つの凝固した滑りゆきに、対応する。それは、私のおこなう世界集中を、それと同時に根柢からくつがえしていく一つの世界分散に、対応する。³⁶

〈対象－他者〉は、まなざしを即自に送ることができるが故に即自と異なる。けれどもいまだ私に

はまなざしを送ってこない存在である。〈対象－他者〉に対して私は対自のままであり続ける。それに対して、〈主観－他者〉は私にまなざしを注ぎ、それにより私を他有化・対象化してしまう。〈主観－他者〉についてサルトルはこう書いている。

もし、対象－他者が、世界との結びつきにおいて、「私の見ているものを、見ている対象」として定義されるならば、主観－他者と私との根本的な結びつきは、「他者によって見られる」という私の不断の可能性に帰着しうるのはである。私が他者の主観－存在の現前をとらえるのは、他者にとっての私の対象－存在の顕示においてであり、またその顕示によってである。(傍点は原文のまま)³⁷

まなざしを注ぐという点において、「他者の根本的な転向があって、これが他者をして対象性から脱出させる」³⁸ が、先に述べたように、〈対象－他者〉のままでは、私をまなざすことは決してない。「私は、他者が私に投げかけるまなざしを、彼の対象的存在の可能的なあらわれの一つと見なすことはできないであろう。」³⁹ 私にまなざしを注ぐ他者は、〈主観－他者〉なのである。「まなざしの体験において、私は、顕示されない対象存在としての私を体験することによって、他者のとらえがたい主観性を、直接的に、私の存在とともに、体験する。」⁴⁰

「他者は、本性上、世界の外に存在する」⁴¹ から、〈主観－他者〉は、私の能動的・主体的な知覚・認識や構成によっては現れない。⁴² まなざされて他有化・対象化された自分を存在体験することにより、私は〈主観－他者〉に出会う。「われわれは、他者に、出会う rencontrer [begegnen] のである。われわれは、他者を、構成するのではない。」(傍点は原文のまま)⁴³ 「他者は、原理的に、とらえられないものである。」⁴⁴ というのは、私の意志とは無関係に、突発的・在るがままに、無媒介的に直接出会うだけだからである。

まなざしを投げかける〈主観－他者〉にとって私は他の諸々の対象、即自とは異なっている。対自同士の関係は、対自と即自との関係とは異なっている。「他者は、彼が芝生を眺めるようなぐあいに、私を眺めることはできないであろう。」(傍点は原文のまま)⁴⁵ なぜなら、私は見られるだけでなく、まなざしを返し得る対自存在だからである。

私は、〈主観－他者〉のまなざしを、「私自身の諸可能性の固体化および他有化」⁴⁶ として捉える。私は、自分で自分を決定することができず、「他人にとってそれであるところのこの存在」⁴⁷ へと変えられてしまう。〈対象－他者〉は私の世界を変えるものであったが、それは私の世界の対象に影響を及ぼし得る別の対自として、私にまなざしを送らない限りにおいてであった。だから、〈対象－他者〉が私の可能性を奪って他有化することはありえない。しかし、〈主観－他者〉は、まなざしによって、私を他有化してしまう。この結果、私の世界は、〈対象－他者〉による変容よりも一層大きく、「世界の全面的変貌をもたらす。」(傍点は原文のまま)⁴⁸ サルトルのことばを引こう。

さきに、われわれは、対象－他者の方へ向かっての私の世界の流出を、「内出血」と呼ぶことができた。というのも、事実、私のこの世界が他者の方へ向かって出血するときにも、私の方ではこの他者を私の世界の対象として凝固させるという事実そのものによって、その出血はくい止められ、局所化されていたからである。かくして、一滴の血も失なわれずに、すべては、私の入りこむことのできない一つの存在のうちにおいてではあるにせよ、回復され、隈どられ、局所化されていた。ところが、ここでは、反対に、この逃亡ははてしがたい。この逃亡は外部に自己を失なう。世界は世界のそとに流出し、私は私のそとに流出する。他

者のまなざしは、この世界における私の存在のかなたに、この世界でありながら同時にこの世界のかなたにあるような一つの世界のただなかに、私を存在させる。(傍点・ルビは原文のまま)⁴⁹

〈対象－他者〉は私の意味づけと異なる意味づけを世界に与え得る。私の世界は、〈対象－他者〉の意味づけによっていわば局所的に変容を被る。〈主観－他者〉の場合、私にまなざしを注ぐことによって、私の意味づけを否定し、無効にさえし得る。私の世界は〈主観－他者〉により私の意味を奪われかねないのである。

私が他者にまなざしを注ぐ時は〈対象－他者〉が現れ、私が他者にまなざしを注がれる時は〈主観－他者〉が現れる。両者を同時に経験することはないし、対自たる私と〈主観－他者〉が同時に現れることはない。私と〈主観－他者〉とは非対称的關係に置かれているのである。サルトルはこう強調する。

私はこう言いたい。「世界を知覚すると同時に、われわれのうえにそそがれている一つのまなざしをとらえることは、われわれにはできない。それはどちらか一方でなければならない。」というのも、知覚するとは、まなざしを向けることであり、一つのまなざしをとらえるとは、世界のなかにおける対象－まなざしを把握することではなく（もっとも、このまなざしがわれわれのうえに向けられていない場合は別であるが）、まなざしを向けられているのを意識することであるからである。(傍点は原文のまま)⁵⁰

これにより、「いかなる瞬間にも、他者は、私にまなざしを向けている」(傍点は原文のまま)⁵¹ から、他者との基本的關係は、まなざしを向けるか向けられるか、相手を対象として自由を奪うか自らを対象とさせられて自由を奪われるか、の相克となるのである。⁵² かくして、「相剋は、対他－存在の根原的な意味である」⁵³ といわれる。

ここまで、サルトルの他者論を追ってきた。〈主観－他者〉は、コミュニケーションの場において、ことばのやり取りをし合う〈こと〉において、私の意味づけが通じない、私の意味づけと異なる理解をするという体験を通じて不意に顛われる。〈主観－他者〉は、私と同時に対自とならない点において、私と非対称的な關係に置かれる。

〈主観－他者〉は、ことばの意味においても、私の意味体系の外部に位置し、私の意味づけたように・意味した通りに理解してくれるとは限らず、逆に私の意味づけの自由を奪い、自らの意味づけを私に押し付け、私がそれを受け入れざるを得ない状況を作り得る。サルトルによれば、「他者は、言語にその意味を与える者として、つねにそこに現前しており、つねにそこに体験される」⁵⁴ のである。私のことばは、他者が意味を付与しない限り、何ら意味を持たない。⁵⁵ 私の意味づけた意味は他者によって受け入れられない限り意味とは呼べない。意味の決定権は他者が握っているのである。「私のいろいろな表現の《意味》は、つねに、私から脱れ出る。私は、私の意味しようとしていることをはたして私が意味しているかどうか、正確に知ることができないし、はたして私が有意味的であるかどうかということさえも、正確に知ることができない」(傍点は原文のまま)⁵⁶ のである。私は、対話者が〈主観－他者〉として現れるや否や、他有化され、意味の決定権を奪われ、ことばの自由を奪われる。〈主観－他者〉は、ウィットゲンシュタインが『哲学探究』の中で登場させたような、あるいは、クリプキが解釈したような、私たちの理解とは異なる理解を持って数列を書き続けていくような存在なのである。こう見てくると、〈主観－他者〉は「教える－学ぶ」モデルで出会う他者であるといっ

て良いだろう。

繰り返しになるが、〈主観－他者〉はあくまでも〈もの〉ではなく〈こと〉において顕わになることを忘れてはならない。認識や近くで把握できる〈主観－他者〉という〈もの〉がいるのではなく、言語ゲームが円滑に進まない時、つまりコミュニケーションの「交通」の側面が浮かび上がる時、その〈こと〉において〈主観－他者〉は唐突に顕わになるのである。一見すると、私の意味づけた意味が対話者に受け入れられて、言語ゲームが円滑に進んでいくように思える場合は、他者性が隠蔽されているに過ぎないことは既に述べた通りである。対話の相手が、私の意味づけた意味ではない理解を示した時、想定外の反応を示した時、その〈こと〉において対話者の言動がまなざしになり、私は對他存在へと変わり、〈主観－他者〉が顕わになって体験される。⁵⁷

私が他者にまなざしを注ぐ時、つまり〈対象－他者〉が言語ゲームの対話者の時は、私の世界は局所的に変容を被り、私の意味づけと異なる意味づけが現れ得る。一方、私が他者にまなざしを注がれる時、すなわち〈主観－他者〉が言語ゲームの対話者の時は、私の世界は全体に変容し、私の意味づけは否定され、無にされる可能性が生まれる。言語ゲームは、私と他者との間で、意味づけるイニシアティブをどちらが持つかによる相克となる。

私は、〈主観－他者〉の登場によって自らのことばや意味の決定権を奪われる。理解されない、想定と異なる行動が返ってくる、という対話者の反応（まなざし）を存在体験することによって、私は自分の意味づけが通じなかったことを知る。そうなった場合には、相克に従う限り、他者の意味を受け入れるか、もしくは他者の自由の内に同化して己自らが即自的己自たらんとするか、または態度変更して「教える」立場に立つか、いずれかを選ばざるを得なくなる。また、相克に従わなければ、別の考え方として、相克という考え方そのものを否定し、私の自由と他者の自由が両立し、双方の存在が共存存在であるとみなして解決法を探ることになるだろう。

サルトル自身は『存在と無』で相克に従う立場をとり、それ以降、相克に従わない道を探ったように思われる。『存在と無』では次のように述べている。「われわれは、決して、平等の次元に、具体的に身を置くことができない。いいかえれば、他者の自由の承認が、他者によるわれわれの自由の承認を、必然的にともなうような次元に、われわれは具体的に身を置くことができない。」⁵⁸ この当時の彼に従えば、私がことばの自由を奪い返し、意味の決定権を取り戻すためには、他者にまなざしたることばを返し、〈主観－他者〉を〈対象－他者〉へと変えねばならない、ということになる。他者との関係はこのような相克なのか、それともサルトルが『存在と無』以降、道を探ったような相互性を基本とする対人関係を追究していくべきなのか、ここに他者とのコミュニケーション論の要諦がある。筆者はまだそれを論じきれない段階になく、機会を改めて検討したい。

注

- 1 ヤーコブソン 『一般言語学』 pp. 187-188
- 2 ヤコブソン・モデルと呼ぶが、このモデルは最も一般的であり、ヤコブソンの独創性に満ちているわけではない。
- 3 コードや規則が存在する場所を、語る主体ひとりひとりの頭の中に求めるのか、社会・共同体に求めるのかは、現象学か構造主義かの分岐点になるが、ここでは問わない。
- 4 柄谷 『探究Ⅰ』 p. 9
- 5 同上 p. 6

- 6 私が生きている意味世界が私以外の者によって既に作り上げられていることはいうまでもないが、ここでの論旨には関係しない。
- 7 柄谷 『探究 I』 p. 6 参照。
- 8 同上 p. 11 参照。
- 9 同上 p. 8
- 10 同上 p. 8
- 11 立川 『誘惑論』 p. 127
- 12 柄谷 『探究 I』 p. 7
- 13 同上 p. 8
- 14 同上 p. 8
- 15 同上 p. 8
- 16 同上 p. 8
- 17 同上 pp. 8-9
- 18 同上 p. 14
- 19 同上 p. 39
- 20 ウィトゲンシュタイン 『哲学探究』 363 節 p. 227
- 21 立川 『誘惑論』 p. 7
- 22 同上 pp. 7-8
- 23 柄谷 『探究 I』 p. 41
- 24 同上 p. 41
- 25 宇野 「サルトルの〈ねばねばしたもの〉」 p. 91
- 26 同上 p. 92
- 27 立川 『誘惑論』 pp. 37-38
- 28 この「猫」の比喩は、先に見たように柄谷の文章に拠っている。
- 29 立川 『誘惑論』 p. 38
- 30 サルトル 『存在と無 第二分冊』 p. 78
- 31 同上 p. 79
- 32 同上 p. 81
- 33 同上 p. 83
- 34 同上 p. 83
- 35 同上 p. 84
- 36 同上 p. 84
- 37 同上 p. 86
- 38 同上 pp. 86-87
- 39 同上 p. 87
- 40 同上 p. 118
- 41 同上 p. 39
- 42 〈主観－他者〉も〈対象－他者〉も、世界地平の彼岸（外）に立つ。だから、認識によって捉えることができず、出会うという存在体験によって捉えるしかない。他者は、私により構成されるという現象学的な考えをとることはできない。他者は、私により構成されないという点で、私の内に意味と妥当性を持つとはいえず、私に当てはまる意味が他者にも当てはまると考えることができない。
- 43 サルトル 『存在と無 第二分冊』 p. 72
- 44 同上 p. 414
- 45 同上 p. 87
- 46 同上 p. 101
- 47 同上 p. 101
- 48 同上 p. 115

- 49 同上 p. 97
 50 同上 pp. 90-91
 51 同上 p. 88
 52 同上 p. 316 参照。
 53 同上 p. 316
 54 同上 p. 339
 55 同上 p. 338 参照。
 56 同上 p. 338
 57 〈主観－他者〉がまなざしを送るように、即自も、自らが帯びていた意味が剥がれ落ち、存在が剥き出しになって私の意味体系の彼方に位置づけられた時、私にまなざしを送る。『嘔吐』の中でマロニエの根の存在が剥き出しの塊と化すエピソードは、即自が〈他者〉として顕現したとみなしうる。このような〈他者〉も、不意に私を襲う。柄谷は〈他者〉を猫に似ているといったが、猫だけではなく即自すら他者性を持つのである。ただし、即自は世界の内から私を襲う点で〈主観－他者〉と異なるだろう。
 58 サルトル 『存在と無 第二分冊』 p. 414

参考文献

- サルトル 『存在と無 第二分冊』 松浪信三郎訳 人文書院 1958 年
 ウィトゲンシュタイン 『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』 藤本隆志訳 大修館書店 1976 年
 ローマン・ヤーコブソン 『一般言語学』 川本茂雄監修 田村すゞ子他訳 みすず書房 1973 年
 宇野邦一 「サルトルの〈ねばねばしたもの〉」『現代思想 7 特集 サルトル以後のサルトル』 青土社 p. 82-p. 95 1987 年
 梅木達郎 『サルトル 失われた直接性をもとめて』 NHK 出版 2006 年
 柄谷行人 『探究 I』 講談社 1986 年
 北見秀司 「サルトルにおける二つの「他者」」『現代思想 7 特集 サルトル以後のサルトル』 青土社 p. 114-p. 130 1987 年
 上妻精 「サルトルにおける他者の問題 フッサール、ヘーゲル、ハイデガーとの対決」『理想 8 サルトル』理想社 p. 123-p. 138 1980 年
 小松学 「他者との関係としての言語 サルトルとレヴィナス」『サルトル 21 世紀の思想家 国際シンポジウム記録論集』 石崎晴己・澤田直編 思潮社 p. 237-p. 253 2007 年
 小松学 「サルトルとレヴィナスにおける言語と主体の問題－呼びかける／応答する主体－」『立命館大学人文科学研究所紀要 94 号』 立命館大学 p. 105-p. 128 2010 年
 末次弘 『サルトル哲学とは何か』 理想社 2002 年
 立川健二 『誘惑論』 新曜社 1991 年
 水野浩二 「サルトルにおける他者論の可能性」『哲学 38 号』 北海道大学哲学会 p. 1-p. 17 2002 年
 吉永和加 「隔絶した自己と他者とを繋ぐもの：サルトルにおける責任について」『メタフィシカ 35』 大阪大学 p. 13-p. 26 2004 年

(いはら ともあき 英語コミュニケーション学科)